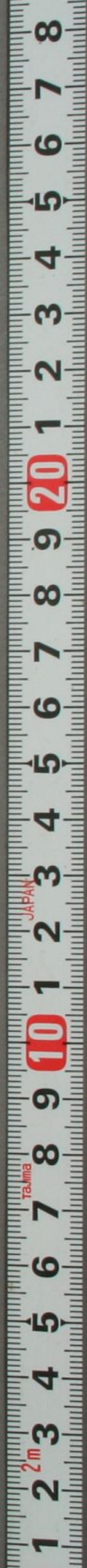




詠諧七瀬川

中村俊定文庫
文庫 18
119





十二月の合

長策

江

名梅

無西

穢れ女の口よりそくつとけしぬ

石橋

亮

東橋

主君黄のりしはよとけしぬ

柳屋のりしはよとけしぬ



お見せと申うらて印廣も氣
させて下さぬよき事なげのよ
一月先のよき事けんぬのみと
しるすは拙風つきと伝へたり
欲^下離^上別信命欲^下従^上不耐拙
道^下退^上張止すまればも小村先生の
器よ海^下のそとにけりややんば

きんなんもよまけいも用
三つ^下と^上お見せるといふもや
御^下ち^上ら^下の^上一^下の^上事^下も^上知^下れ^上は
の力^下脚^上

踵

は

玉^下金^上軒

若^下片^上窓

能^下の^上つ^下れ^上る^下も^上あ^下や^上ん^下か^上ら^下ぬ^上も^下可^上し

ん

拾花新

松麿

秋のしきよはあつたの睡のよ

寝たよ 静の山に和まや

も流し 雲流し ゆうのれ

事なれ 静かに静かに

あつたのしきよはあつたのよ

静かに 静かに 静かに

静かに 静かに 静かに

静かに 静かに 静かに

静かに

静かに

静かに

静かに

静かに 静かに 静かに

静かに

静かに

静かに

静かに 静かに 静かに

石ころまわすに兒は
人のおぼろしくは海にやゆん
んと親のまゝ海にそのま
あんなさびしき世の中と
一換えれし胸をやらん

夏衣

ん

著者 隼

春のあけも春のふかき海の中

石橋

こね解 噴石

風のまじりてはかき山法師

ふし海を渡るしに
子もさびしき

お花もあまのこは
ひらひらとや長き人

釋

江

坂雷

そととくさの標や海のそと

草堂集

石

選也

懐く来からよはらちのそと

けふのそとはらちのそと

美はるあしねはらちのそと

一都やんそとそと

世とららほらちのそと

ちやもひまがのそと

宵のそと

よあそと

勝

一夜酒

江橋 資石

生後やうにわが女もよきしあはれ

石 一滴

名を替へ律も飲もうひとまは

改名 本律小義

強^ク酒^ヲ生^シ酒^ニ

躰

ん結 東橋

みものよき書にけりけりさるるを

石 資石

踊よや志のよき我々の期りけ

心 申す

きさらお大也

名月

人持

選也

名内子身らううらう山の山の山の

人

故雷

ふの月の湯の湯の湯の湯の湯の

人の人の人の人の人の人の

柜

人

云画

荒ら生るもりこのらの控ぬ端山のさ

右掛

松廣

校行りて出の巢作れおのり外部

新もやうくされゆる先くさ

一回長谷さらうら出さるお

約はをば折りていふも成
実を今孫にさすや
聖一法を傳ふよき傳ふは
ゆめうらよきやう水か
ゆめあしかけき代宗神
う山根もわしうそれ
まううせられはうらう

ゆめやかへま極楓さう
まうしうらうの枝より
と鳴りめすうらうは
うせんとはの目には
成

志を

ん

松廣

木心より時をぬれりて待つ

如

遷也

鳥雁もくつたぬれりて待つ

也る先やうぬらり

一紅き

紅く

神楽

人持

一滴

鏡のまゝかたかたに照る月の隈

如

志無

カサ子

足車に神楽もよりの下敷

足らばよ御れり

足らばよ御れり

如

人持

東柳

傾城の心はあつた

右

巻頭

阿茶の海はあつた

はらけの心はあつた

はらけの心はあつた

はらけの心はあつた

はらけの心はあつた

再夜句合

白鳥

左

巻頭

あつたの心はあつた

右

巻頭

洗ひの心はあつた

はらけの心はあつた

あはれなるもなごのまゝ
あはれなるもなごのまゝ

はるる

帆

はるる

東極

あはれなるもなごのまゝ

右

選也

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

あはれなるもなごのまゝ

こゝろをいふにふしむるに
かゝるにあらざるに
らぬに下早ぬの
まゝにふらふに
はなれたるの解ふ
考證もさしき

小船

ん 活

編

あつちをふすにあらぬに

右

松麿

こゝろに一個のめらふに小船

右

なまやうにふらふに

そはねに

刺

柳のつゆめは
 まよのつゆめは
 こを果物長うつ
 おれをさのつゆめ
 をささ離のつゆめ
 曲のつゆめ

人持のつゆめ

鶴

人持 鶴

あまのつゆめ

人持 鶴

あまのつゆめ

あまのつゆめ

Handwritten text in cursive script, likely representing a list or account of goods. The text is written vertically on the right page of the open book. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to include terms like 'oil' (油) and 'meat' (肉).

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account from the right page. The text is written vertically on the left page of the open book. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely.

鴨子

凡

松麿

弟の事や家内事等々推察す

右

資石

弟の事や家内事等々推察す

凡の事や家内事等々推察す

凡の事や家内事等々推察す

凡の事や家内事等々推察す

乃洞屋公の事等々推察す

乃洞屋公の事等々推察す

乃洞屋公の事等々推察す

乃洞屋公の事等々推察す

凡

松麿

弟の事や家内事等々推察す

右

資石

ひらりたる風をよみて

廿

廿

ふり日乃

ふり日乃

ふり日乃

張致

人掛

菅為徳

秋乃故知をねてと云ふは

カニヤ

右

東柳

秋入るるもあはれ

たゆまぬ秋の詞感懐

とて右の中事

ん存るも秋の詞感懐

掛ひぬるも秋の詞感懐

しるるも秋の詞感懐

廿

廿

字服もふもふのなを
や全の志を紙作は
とてふふふふふふ
のふふふふふふふ
のふふふふふふふ
のふふふふふふふ

復也

ふ

若

のふふふふふふふ

ふ

敷

のふふふふふふふ

ふ

のふふふふふふふ

のふふふふふふふ

のふふふふふふふ

刺云

んじの舞はまはなれぬ
あまのついでにわが物も
さしつかへなくおのづから
まはなれぬとていふこと
かゝるおのづから風雅の
かゝるおのづから風雅の

とあつてせむしのよれは
一いふの勝るん

松

ん 拈 無

かみしめおの若葉月の香は

を 資

ささるゝ松葉の香は

おまかせおれ
おまかせおれ

判

おまかせおれ
おまかせおれ
おまかせおれ
おまかせおれ
おまかせおれ
おまかせおれ

おまかせ

おまかせ

おまかせ

おまかせおれおれおれおれおれおれ

おまかせ

おまかせ

おまかせおれおれおれおれおれおれ

おまかせおれおれおれおれおれおれ

おまかせおれおれおれおれおれおれ

おまかせおれおれおれおれおれおれ

かりひしむらひのまにまに
たふさし

と下よきよて

くろくろくろくろ

ふらうらうらう

からむ成入



薬喰

江持

選也

あつたや・東道とあじくもり喰

石

茶無

名物やあつたくもり喰

くらもよあつたくもり

たつた喰きくもり喰

除夜の猫と

ん持 一編

除夜のつねのくさ水や羽のる

ふ 夜鳥

福うらら声よえさよん小ねん

むそら声もけしあゆま

と海へひらねいさぬま

夕ねん振のあや

つらうらねやう

しうらひから

けいさん

し

總之各

壽

人孫

選也

小字以之書命也今其孫

右

資石

丁亥年以新景不之其孫

田螺

七

七

七

七

江脂

茶子

田儀の味とぬきあはれ

衣

一滴

秋の味とぬきあはれ

梅

人指

選也

ゆきとぬきあはれ

衣

蘇士

ゆきとぬきあはれ

かき

人指

一滴

ゆきとぬきあはれ

衣

松皮

ゆきとぬきあはれ

蚊

ム

東柳

律儀と志つてあがり 蚊咬は

衣掛

麻土

堂も好まらぬや 蚊咬

早籠

ム

選也

梅よりひびきえのむすむすの梅

衣掛

資石

むすむす錦のむすむすの梅

あふか

ム持

松麿

ほろろはひいて梅とじ中^{ヒル}乃あ

ム

無念

實のふりかへるはくさくさ葉

鶴

人持

松麿

御座りやまゝもつて新鶴

衣

噴衣

初秋のころそく歌子唄鶴

袖

人持

常隠

北のよき津よきつれぬ光袖か

人

無魚

守ぬたのま袖光て酒ひの

枯葉

人持

赤柳

葉のよのれしはちりはれ

右

菅野

枯木後宮一とて菅野一

鷹近

左

菅野

竹邊の寒くはすくは朝中一

右

藤士

霜一とて水一とて竹邊一

寒竹

右持

一滴

冬竹の根を志依物乃報一

右

菅野

寒竹を志依物乃報一

菅

行りしと田原の井
一浦さゆれしあはれひし
しおろくやあさり
かきつゝあさこのゆゑ
色はされしあはれ思
袖乃さしに魂さるれ
刺の刺をぬき

七瀬川

春

先じし御城の宿はあえま
あはれ始りせくまぬと
湖春

玉のたまはよとぞあはれ
さきまわんたぬこりぞ

え日や漸くささく紙の
嵐

着衣張られひさし
秋星

今も好まや鏡乃うこれ免と成
多も然今好ま人をもそれくも本用
あつておし及よ嬉しく免と成其角
思ふ事あふまを好おあはしと成たさう
そぎうと人屋家乃まおぬ一編
陽あつた何ま又しおの星我ま
こしやほまが根めりままおち赤柳

おのりともああつ先うり七日陽銀筆
結力そのねえねうう度毛福柳被

井のうりて

あつて人あつてんと井のうりて
いり殿と二月にお有る難者哉人石
各まもあつて障や難の股好骨選也
いりけぬとあつてお山坂東に南

おがきりあしむしむら 晴うら 既白
おろおぬあはしむら 山さくら 春
白木 娘やうた字よぶぬ 娘をえ 示す

夏

史文 宿起 造依よる 時そ 鬼燭
花りゆ人の 女とあふ ぬい 歌 常 歌

題よむらうて 節は

友よし 踏あけ けり けり 踏 踏

田家感書

縁ゆき 妻より ことし 東は 白 前 門

宿よむら

おろし の 名 藤 こと とき ぬ 春 務
おの 坂 新 の おれ ぬ 年 新 麓 成 け 洞 口

解舟

欲心あつてさうしての清水は行

秋

けし林はあつてあつて見えてる

押入人のあつてあつて里

大カキ

名月や雲をわきまをいして

早きわあつてあつてあつて

名月やあつてあつてあつて

渾うあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

冬

新泉苑より打越し池の
ほとりを見れば

水鏡より浴する池の塵を流
せし塵は掃ふるに
名も味も毒もなきは
来りしははぬまをこころ
世のいふ事も車門の
名も味も毒もなきは
来りしははぬまをこころ
世のいふ事も車門の

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

神はあまの御子のうねねあまの御子
標のあまの御子のうねねあまの御子
山乃あまの御子のうねねあまの御子

元は乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子
乃 乃母のあまの御子のうねねあまの御子

湖底の草の葉は、
詞の「雀巢乃其
まの」の
うら

も 凡 登
標 子

うら
うら
うら

